

韓半島南部の栄山川流域の主な前方後円墳と 古代日本との交流を示す出土物



韓国全羅南道にある代表的な前方後円墳のひとつ、海南長鼓山古墳



海南長鼓山古墳の石室には、北部九州の古墳石室でよく見られる赤いベンガラ塗料が塗ってある



韓国南部全羅南道の光州にある月桂洞古墳



上の写真は前方後円墳の周辺部分が都市開発されて原型がわかりにくくなっているが、左の模型は建造当時の模様を再現したものである。前方の部分と後円の部分のデザインがよくわかる。古墳の周囲には堀がめぐらされているほか、古墳本体の縁部分には日本の古墳のような埴輪が配置してあるのが特徴だ。この点を見ても古代の倭人が建造にかかわったのではないかと見られている



上空から撮影した新徳古墳（左）は前方後円墳の形がよくわかる。右は雪化粧をした新徳古墳



光州の月桂洞古墳から
出土した木製の埴輪



光州の月桂洞古墳から出土した
埴輪。倭系とみられる



海南竜日里古墳から出土した倭の須恵器



新徳古墳出土の鉄の刀剣。倭系
豪族の威信財とみられる



新徳古墳出土の鉄製甲冑



韓国の益山笠店里古墳から出土した
金の王冠



熊本県・江田船山古墳
から出土した王冠



江田船山古墳出土の
金飾り（上）と百済王
の武寧王墓から出土し
た金飾り（下）



熊本県玉名郡和水町の江田船山古墳。
前方後円墳であり、周辺にも前方後円
墳がある。江田船山古墳からは百済系
の文物が出土したほか国宝銀象嵌銘大
刀も出土した



江田船山古墳から出土した
飾履



韓国の益山笠店里古墳から出土した
百済の飾履

韓半島南部に倭人が造った前方後円墳

—古代九州との国際交流—

朴 天 秀

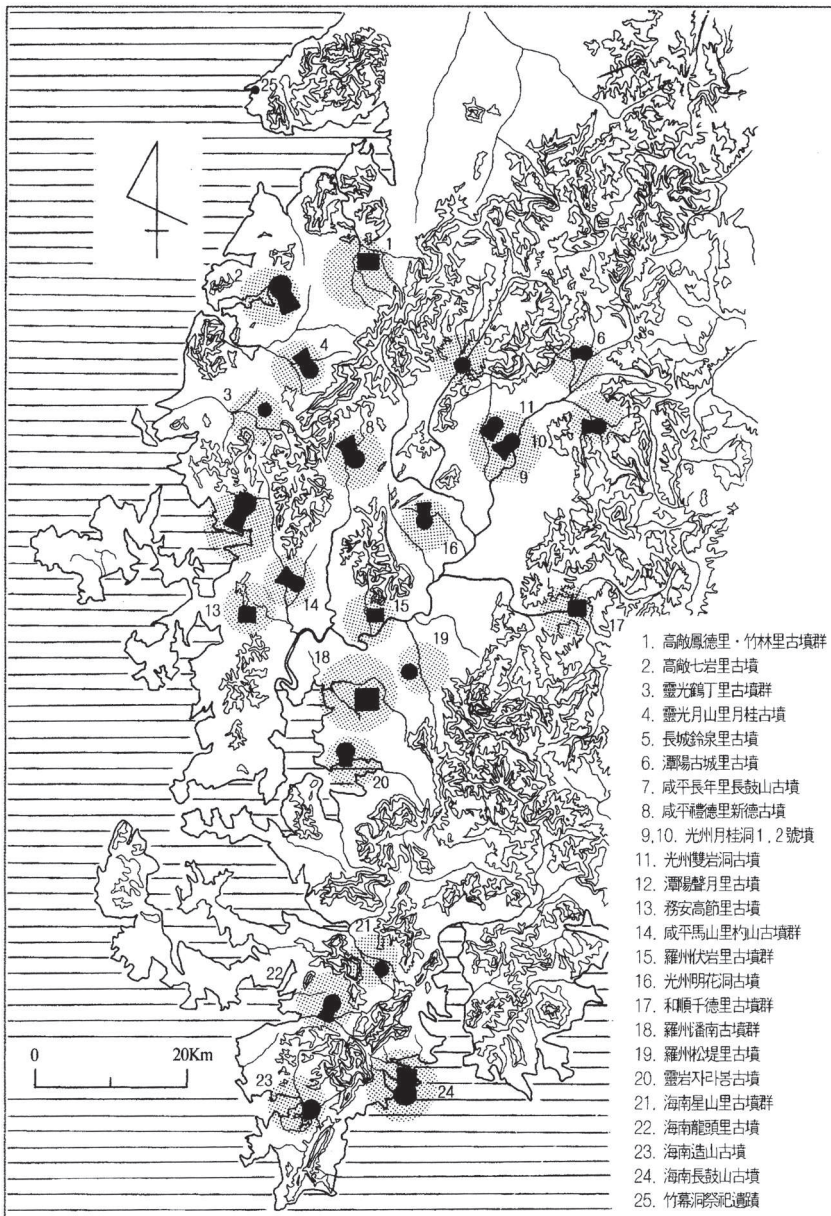
(慶北大学考古人類学科教授)

はじめに

従来日本列島のみに分布する墓制と考えられてきた前方後円墳は 1980 年代、韓半島南部の栄山江流域で発見されて以降、現在まで計 13 基が確認されてきた。(図 1 参照)いずれも 5 世紀末から 6 世紀前半にかけて造られたものだ。

栄山江流域における前方後円墳の被葬者の出自と性格について韓・日両国で活発な議論が行なわれてきており、その被葬者像は在地首長説、倭人説に大別される。さらに後者は倭からの独自の移住説、倭系百済官僚説などの説が提示されている。

個別的な論旨は若干異なるものの、在地首長説は百済に従属していない栄山江流域の在地首長層が、百済の当地域に対する進出、領有化に対抗するなかで、前方後円墳を倭との関係をあらわす一時的な政治的アピールとして墓制に採用したとみる解釈でほぼ一致している。しかしながら、これまで筆者が明らかにしてきたように、栄山江流域の前方後円墳が、従来古墳が造営されなかった地域に、在地的な基盤を持たず突如として出現する様相から、上述のような説は受け入れがたい。このことは、在地の伝統的な墓制である甕棺墓や石室墓が首長系列を維持しながら、前方後円墳と並行して造営されることから傍証できよう。在地首長あるいは倭人が百済との政治的な関係なしに、交易をとおした交流のなかでその墓制を導入、あるいは移住したという解釈もある。だが、そのような解釈をするには、なぜ 5 世紀末から 6 世紀前半という一時期のみに



【圖1】 榮山江流域 前方後圓墳과 古墳의 分布

前方後円墳が造営されたのか、その歴史的な背景に対する説明が必要であろうⁱ。

ここではまず、栄山江流域において前方後円墳が在地的な古墳系列を持たず、突如として現れる過程を検討したい。また、栄山江流域における前方後円墳の被葬者の出自について、ほかの考古学資料を提示しながら具体的にアプローチしたい。

最後に、栄山江流域における前方後円墳出現の歴史的な背景について、熊津期の韓半島南部における政治的状況と、その造営勢力である九州勢力と大和王権、そして百済王権との関わりをとおして考えたい。

1. 栄山江流域における前方後円墳の出現過程とその出自

1) 栄山江流域における前方後円墳の出現過程

これまでに発見された 13 基の前方後円墳はいずれも在地首長墓の密集している場所を避けるようにして造られ、さながら単独墳のように存在している。その主要な例を以下に列挙する。

高敞郡七岩里古墳は、靈光郡法聖浦に流れる九岩川水系に突如として現れる。この地は、全羅北道南部における在地勢力の中心地である雅山地域の鳳德里古墳群と山地を越えて離れた距離にある。

靈光郡月桂古墳は在地の古墳が集中する臥灘川水系の本流や、仏甲川水系と離れ、大山川に面して独立して出現する。

咸平郡新徳古墳は、大規模に造営された万家村古墳群と近接し造営される。しかしながら、万家村古墳群の造営時期は 3-4 世紀と考えられ、5 世紀代には古墳が造営されていないことから両者の系譜はつながらない。

咸平郡馬山里の杓山古墳は、13 基からなる古墳群に属しており、前方後円墳である杓山古墳の出現を契機に、古墳群が造営されたと考えられる。

栄山江水系の上流域に位置する光州市の明花洞古墳・月桂洞古墳、長城郡鈴泉里古墳、潭陽郡声月里古墳も、従来古墳が造営されなかった地域に突如とし

て出現する。

栄山江水系の下流域に位置する霊岩郡チャラボン古墳は、この地域の中心地である古南海湾に河口を形成する三浦江水系の羅州市潘南地域を離れ、古都浦湾沿岸に突如として現れる。

海南半島西北方の龍頭里古墳は、三山川河口の右岸に位置する甕棺を埋葬主体とする院津里籠岩古墳群と、左岸の鳳壑里新琴古墳が密集する海倉湾から離れ、内陸に湾入した地点に突如として現れる。西南方の造山古墳は5世紀までの中心地であった県山川流域から離れ、それまで古墳が造営されなかった九山川流域に突如として出現する。東南方の方山里長鼓山古墳は従来古墳が造営されなかった北日面一帯に突如として出現する。これを契機とし、その周辺に円墳、方墳、石棺墓からなる倭系古墳群が形成されることになる。

このように、栄山江流域における前方後円墳は継起的に古墳が造営された地域には出現しないという共通した様相を見せている。すなわち、在地的な古墳系列を持たず、5世紀末から6世紀前葉にかけて突如として現れることから、在地首長墓とは想定しがたい。

2) 栄山江流域における前方後円墳被葬者の出自

この地域の前方後円墳の埋葬主体部である横穴式石室は、平面方形で穹窿形天井を呈する百済の宋山里型石室とは異なり、平面長方形で平天井を呈し、立柱石と腰石を配する形態である。そして時には石室に赤色顔料の塗布が確認される点が特徴であることから、かねてから北部九州地域にその系譜が求められてきたⁱⁱ。新徳古墳では段築と葺石、チャラボン古墳では月桂洞古墳と同様の盾形周溝が検出され、月桂洞古墳と七岩里古墳、長年里長鼓山古墳では埴輪の存在が確認された。光州の月桂洞古墳からは木製の埴輪が見つかった。これは大阪や奈良で出土した木製埴輪と酷似している。

副葬品としては、新徳古墳では、半球形装飾付握じり環頭大刀、刃部断面三角形銀装鉄鉾、脇当など倭系の副葬品が出土し、造山古墳からは繁根木型のゴ

ホウラ製貝釦^Ⅲ、仿製鏡が出土した。また海南長鼓山古墳からは須恵器も出土した。

繁根本型のゴホウラ製貝釦は、佐賀県の関行丸古墳、福岡県の王塚古墳の周辺に位置する壱山古墳と、熊本県の江田船山古墳に隣接する伝佐山古墳から出土していることより、これら九州の集団によって栄山江流域に搬入された可能性が極めて高い。いっぽう、栄山江流域産の土器は対馬と北部九州に集中する傾向が見られる。とくに周防灘に臨む福岡県荏田町の番塚古墳、福岡市の梅林古墳では栄山江流域産の鳥足紋土器が石室内に副葬されており、日本列島の前方後円墳でこの地域産の土器が副葬されたのはこの2例のみである。栄山江流域産の土器の分布をとおして、造山古墳で見られるような繁根本型貝釦の分布と九州系石室の分布との強い相関性を認めることができる。

以上のことから、栄山江流域における前方後円墳の被葬者は、横穴式石室、繁根本型のゴホウラ製貝釦、栄山江流域産の土器の分布、江田船山古墳の副葬品のような百済系文物の分布から周防灘沿岸、佐賀平野東部、遠賀川流域、室見川流域、菊池川下流域などに出自をもつ複数の有力豪族と想定できる。

2. 栄山江流域における前方後円墳被葬者の性格と役割

1) 栄山江流域における前方後円墳被葬者の性格

新徳古墳出土の頸飾は武寧王陵で、銀張鉄釘と鍔座金具が使用された装飾木棺などは百済地域の首長墓で、使用されたものであり、馬具も百済で製作されたものと考えられる。また、月桂洞古墳でも 銀張鉄釘と鍔座金具が使用された装飾木棺が確認された。これらは百済王室からの下賜品と判断される。

公州市丹芝里の横穴墓群の被葬者は、横穴墓の形態が周防灘沿岸と遠賀川流域のそれと類似する点から、北部九州地域の倭人として、その性格は百済王都の防御と関連する集団と推定することができよう。丹芝里横穴墓群の被葬者は、出自、出現時期、性格が栄山江流域の前方後円墳の被葬者と相関関係を見

せ、前方後円墳被葬者の出自と百済王権との関係を雄弁に物語っている。

579年、『日本書紀』雄略23年の記録によれば、百済の三斤王が死去した際、東城王の帰国を筑紫国軍士500人が護衛したという。この記録は、栄山江流域の前方後円墳の石室構造が北部九州系である点、北部九州地域における百済産の威身財、栄山江流域の倭系古墳に甲冑や刀剣などの武器・武具が顕著に副葬されるという考古学資料と符合する。したがって、護衛のため韓半島に渡った彼らが帰国せずに栄山江流域に配置され、百済王権に仕えたと推定される。

栄山江流域における前方後円墳はまとまりをもたず、ひとつの盆地と水系に1基ずつ分布しており、継起的に造営されないという特徴を持つ。また、隣接した前方後円墳であるにもかかわらず、埋葬主体である横穴式石室の系譜を異にすることは、派遣された倭人が相互に連携することを防ぐため、百済が出自の異なる集団を分散孤立的に、それぞれ配置したと推定される。

熊津期にこの地域に倭人が派遣されたのは、既存の秩序を崩すために在地的な基盤がない外部勢力を移植するという形をとった、高句麗の楽浪・帶方に対する支配方式と類似しており、百済の間接支配から直接支配へと移行する過渡期的な支配方式と見ることができよう^{iv}。

2) 栄山江流域における前方後円墳被葬者の役割

百済は栄山江流域最大の中心地である潘南地域は、在地首長をとすことで間接的に支配し、その周辺は外郭から前方後円墳の被葬者のような倭系の百済勢力を移植することで、在地の豪族勢力を牽制するといった両面的な政策をとっていたと考えられる。

海南半島に位置する倭系古墳の被葬者は、西海と南海を連結する海上交通の要衝の確保と、大伽耶の南海岸の要衝である、任那四県の麗水半島と帶沙の河東地域を掌握しようとする百済の戦略下に配置されたと推定される。また、栄山江上流域に位置する光州地域と潭陽地域の前方後円墳被葬者も、大伽耶を圧迫する百済の戦略によって配置されたと考えられる。このような状況と関連す

るのが、512年、『日本書紀』継体6年、任那四県の記事に見られる唎国守の穗積臣押山の存在であり、倭人が百済の地方官として、対大伽耶攻略、対倭交渉に活動していたことを物語っている。

蘆嶺山脈を越えた最北端の七岩里古墳と月桂古墳は、5世紀代における全羅北道南部の在地勢力の最大の中心地である雅山地域を西方から制圧する役割を果たし、両古墳の被葬者は法聖浦を寄港地とし、対高句麗戦に動員された可能性が想定される。これと関連して筑紫の安致臣と馬飼臣の高句麗攻撃の記録が注目される。

3. 栄山江流域における前方後円墳出現の歴史的背景

1) 熊津期における九州勢力の動向

6世紀前葉以降、日本列島と地理的に近い加耶地域の文物と交代するように、百済地域の文物が急激に倭へ流入するようになる。筆者はその背景として、百済がそれまで独自の克服できなかった対外海上交通の不利を、交通の要衝である己汶、帶沙、任那四県の占有と、栄山江流域の前方後円墳被葬者を媒介に克服した結果と解釈したい。百済による倭王権と九州北部の豪族勢力に対する両面的な外交戦略は、韓半島と日本列島における百済の影響力を強化し、その一方で北部九州勢力も、日本列島における影響力を強化するというように、相互に理にかなったものであった。その仲介役を担った栄山江流域の前方後円墳の被葬者は、百済王権に臣属しながら倭王権と百済王権間の外交で活躍した人物と推定することができ、欽明紀に見える倭系百済官僚の原型とも言える。すなわち、江田船山古墳の百済系装身具や銘文大刀と、その後の欽明紀に見える倭系百済官僚のあり方は、栄山江流域における前方後円墳の被葬者である九州の有力豪族が、倭王権とともに百済王権に両属していたことを示唆しているのである。

栄山江流域における前方後円墳の被葬者は、先進文物を本国の氏族集団に与

え、その代替として、一族の軍事力を提供する窓口の役割を果たしていたと想定される。また、近畿地域の牧が栄山江流域からの移住民によって成立したことは、九州勢力の活動が大和王権との何らかの関わりのなかで行われていたことの傍証となろう。

百済王権が九州地域の豪族を選択した背景は、単に九州が韓半島に近いという理由だけではなく、彼らが5世紀後半から瀬戸内海沿岸と山陰・北陸などに広い関係網を持っていたことが挙げられる。また、畿内の豪族ではなく彼ら選ばれたのは、やはり倭王権の意向よりも、百済王権の意向によるものと考えられる。

6世紀前葉における突如とした九州勢力の興起を象徴するのは、北部九州系石室の拡散と、華麗な装飾古墳の存在である。その背景には、栄山江流域における前方後円墳の被葬者を仲介とした北部九州勢力が、百済の先進文物の受け入れの窓口的役割を担ったことに起因するのであろう。

2) 熊津期における百済王権と倭王権

6世紀前葉における江田船山古墳の百済産副葬品と高野槇製の武寧王陵の木棺は、これまでの加耶地域と倭の日常的取引関係を越え、百済が対倭交易の主導権を握ったことを示すものである。熊津期に栄山江流域に前方後円墳が突如出現することは、このような変化と強い相関性が認められる。

この時期の百済と倭の関係を示す資料が、隅田八幡神社の人物画像鏡の銘文である。この人物画像鏡に記された斯麻という人名は、武寧王陵出土誌石にみる斯麻王と一致するものであり、その銘文のなかには、即位前の継体王の名が登場する。くわえて、この鏡の製作時期を表わす癸未年は、503年に比定されており、東城王が廃され、武寧王が即位した502年の翌年にあたる。512年にいわゆる任那四県割讓、513年に己汶・帶沙事件が発生して以降、百済は諸博士を日本列島に頻繁に派遣するようになる。この時期の諸博士と文物は、仏教という高等宗教を伴うものであり、これは当時の倭王権が望んでいた国家

整備に必要不可欠のものであった^ⅴ。

以上のように百済と倭の本格的な交易は、6世紀以降活発になり、したがって継体朝出現の背景は、百済との活発な交渉と何らかの関わりが求められる。くわえて、東城王が廃され、武寧王が即位する百済の政変と、雄略王権から継体王権に替わる倭の政治的な変動も相互に連動するものであろう。

継体一族は近江に本拠地を置き、以前から若狭湾をつうじて韓半島との交易を含めた交渉を行ってきた一族であった。やがて6世紀前葉になり、百済との交渉を主導することによって王権を掌握したと想定される。そのなかで継体勢力は、これまで河内勢力と密接な関係にあった加耶勢力を排除し、百済を交易の窓口として先進文物を導入しながら河内勢力との差別化を図り、近畿の中での優位を確保していったと考えられる。

また継体王権の擁立には、5世紀後半から瀬戸内海沿岸と山陰・北陸などに広い関係網を持っていた九州勢力が百済王権との仲介などの役割をしたと推定される。その一方で、栄山江流域の前方後円墳被葬者を含めた北部九州の有力豪族の対外活動が頂点に達し、倭王権をおびやかすようになった。その結果が527年に起きた磐井の乱（戦争）と考えられる。

その後、百済による栄山江流域の直接支配と百済の対大伽耶攻略が一段落する状況下で、当地における前方後円墳の造営は停止するようになる。また、倭系百済官僚の出自が畿内周辺に集中することになるが、これは磐井の戦争以後、九州勢力の衰退を示すものであろう。

おわりに

栄山江流域における前方後円墳被葬者が倭人かどうかの議論は、もはや意味がない。彼らがどうして海を渡ったのか、その歴史的な背景の解明こそが、今後の研究の課題である。これには栄山江流域における前方後円墳のみではなく、加耶地域の倭系古墳を含めた総合的な分析が必要である。以上のような

析をとoshi、百済王権、大伽耶王権、九州勢力、そして倭王権における錯綜した関係の解明とその歴史的な意義を提示することをこれからの課題としたい。

<注>

- i 朴天秀、2007、『伽耶と倭』、東京、講談社。
- ii 柳沢一男、2001、「全南地方の栄山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳」、『朝鮮学報』第179輯、pp.113-156、天理、朝鮮学会。
- iii 木下尚子、2001、「古代朝鮮・琉球交流試論－朝鮮半島における紀元1世紀から7世紀の大型巻貝使用製品の考古学的検討」、『青丘学術論集』第18集、pp.7-53、東京、韓国文化研究振興財団。
- iv 朱甫敏、2000、「百済의 栄山江流域支配方式과 前方後円墳被葬者の 性格－」、『韓國의 前方後円墳』、(白馬学術叢書11)、pp.49-99、大田、忠南大学校出版部。
- v 山尾幸久、1989、『古代の日朝関係』、p.315、東京、塙書房。

朴天秀 (パク チョンス) 教授の略歴



1963年、韓国慶尚北道安東生まれ。慶北大学大学院考古人類学科修了後、大阪大学大学院文学研究科博士課程で考古学を専攻。96年に阪大で文学博士号を取得。帰国後、九州の古代遺跡研究のため熊本大学に1年留学。九州一円の古代遺跡を精力的に調査研究した。

韓国では韓国南西部の全羅南道などの前方後円墳や百済、伽耶などの古代遺跡と比較研究をしている。専門は韓国と日本の考古学。共著に「伽耶の遺跡と遺物」(学研文化社)、「海を渡った日本文化」(鉾脈社)、単著に「伽耶と倭」(講談社)がある。

【注】*本論文は、「九州国際大学ハングルコース開設記念行事」の一環として2009年11月2日に朴天秀教授がKIUホールでおこなった「韓半島南部に倭人が造った前方後円墳」と題する文化講演会の講義内容をもとに朴教授が本紀要のために執筆していただいたものである。論文につくカラーグラビア(全4頁)には講演時に上映されたスライドのうち代表的なものを掲載した。